



2020年度 第2回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2021年1月～6月)のポイント

海況

黒潮は大蛇行が継続し、一時的な流路の変動はあるものの、概ねA型^(※1)基調で推移する。沿岸水温は、潮岬以西は「やや低め」^(※2)～「平年並」^(※2)、熊野灘～遠州灘～相模湾は「平年並」～「高め」^(※2)で暖水波及時に「極めて高め」^(※2)、伊豆諸島海域は「高め」、房総～常磐南部海域は「平年並」～「やや高め」^(※2)で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

B型：八丈島の北を通過、流路南端が北緯32度以北で33度以南

※2 平年並＝平年値±0.5℃程度、やや低め＝平年値-1.0℃程度、

やや高め＝平年値+1.0℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度、

極めて高め＝平年値+2.5℃以上。

ただし、鹿島灘～常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

前年並～上回る海域が多い。

カタクチイワシ

低水準であった前年並～上回る海域が多い。

ウルメイワシ

豊後水道では前年並～上回り、

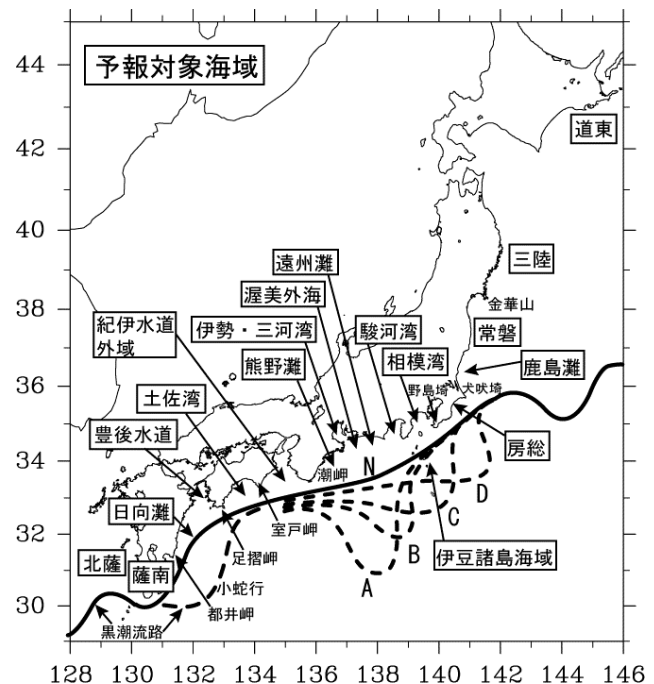
その他の海域では前年並～下回る。

マアジ

前年並。

マサバ・ゴマサバ

マサバは前年並、ゴマサバは低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当 管理部門：渡邊、木村

漁況：浮魚資源部 西田、由上、古市、安田、木下、入路

海況：海洋環境部 市川、日下

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2021年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬～足摺岬沖では、2月以降接岸傾向で推移するものの、小蛇行の東進に伴い一時的に離岸することがある。
- ・室戸岬～潮岬沖では、1月は接岸傾向で、2月以降は離岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・大蛇行が継続し、一時的な流路の変動はあるものの、概ねA型基調で推移する。
- ・房総沖では、概ね接岸傾向で推移するものの、一時的に離岸することがある。

(2) 薩南～房総海域

- ・都井岬～足摺岬沖では、2月以降は黒潮の離接岸変動は小さい。
- ・室戸岬～潮岬沖では、黒潮北縁から一時的に暖水が波及することがある。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域には、黒潮から暖水が波及することが多い。
- ・伊豆諸島南部海域は、暖水域に覆われる。
- ・房総沖では、黒潮から暖水が波及しやすい。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮の一時的な離接岸変動に伴い暖水が波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は、概ね「やや低め」～「平年並」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、「高め」で推移する。
- ・房総～常磐南部海域は、「平年並」～「やや高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.5～4℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4～6℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6℃以上）

経過（2020年7月～12月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・7月～10月中旬は、A型流路の大蛇行が持続したものの、大蛇行の南端が切離と結合を繰り返し、不安定に推移した。この間、遠州灘沖で32°N以南まで南下した後S字状に北上し、御蔵島付近を通過する流路をとることが多かった。
- ・10月上旬頃の大蛇行南端の切離と、上流からの小蛇行通過に伴い、10月中旬～11月上旬にかけて、黒潮が潮岬に接岸するとともにA型流路が解消し、一時的にB型、N型となった。この間、黒潮は潮岬沖でS字状に屈曲後、熊野灘～遠州灘沖を東流し、御蔵島付近を通過する流路をとった。
- ・11月上旬以降、上流からの小蛇行が東進して拡大し再びA型流路となった。この間、黒潮は紀伊半島沖で32°N以南まで南下し、御前埼沖まで北東へ流れた後、石廊埼沖～御蔵島付近を東流する流路をとることが多かった。
- ・房総沖では、概ね接岸傾向で推移した。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁の月平均位置は、7月～12月上旬は接岸傾向で推移した。

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、概ね7月～12月上旬は離岸傾向で推移した。
- ・足摺岬沖では、「かなり離岸」～「著しく離岸」で、室戸岬沖では、「やや離岸」～「著しく離岸」で、それぞれ不安定に推移した。
- ・潮岬沖では、黒潮が接岸した10月中旬～11月上旬を除いて概ね「著しく離岸」で推移した。
- ・紀伊水道外域では、小蛇行の通過や黒潮の接岸に伴い、一時的に暖水波及がみられた。

◎潮岬以東

- ・熊野灘～遠州灘には、黒潮から暖水が波及することが多く、特に8月中旬には黒潮の屈曲部が熊野灘に接岸し、熊野灘～渥美外海を中心として暖水に覆われた。
- ・駿河湾へ向けて一時的に、大島西水道へ向けて断続的に、暖水波及がみられた。
- ・伊豆諸島海域は、黒潮がその西側および北側を流れたため、暖水に覆われた。
- ・房総沖では、8月下旬～9月中旬、11月上旬、12月上旬に黒潮接岸による暖水波及の影響がみられた。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・7月下旬～8月上旬に、冷水の影響がみられたものの、期間を通じて黒潮からの暖水の影響がみられた。

現況（2020年12月15日現在）

(1) 黒潮

- ・ A型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・ 潮岬沖で大きく離岸した後、遠州灘沖で 32° N以南まで南下し、御前埼沖までS字状に北上した後、石廊埼沖を通過し御蔵島付近を流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬沖で「かなり離岸」し、足摺岬～潮岬沖で「著しく離岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘、大島西・東両水道に、黒潮から暖水が波及している。
- ・ 伊豆諸島南部海域は、暖水域に覆われている。
- ・ 犬吠埼沖では、黒潮は「やや接岸」して流れている。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 沖合域に、黒潮から暖水が波及している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

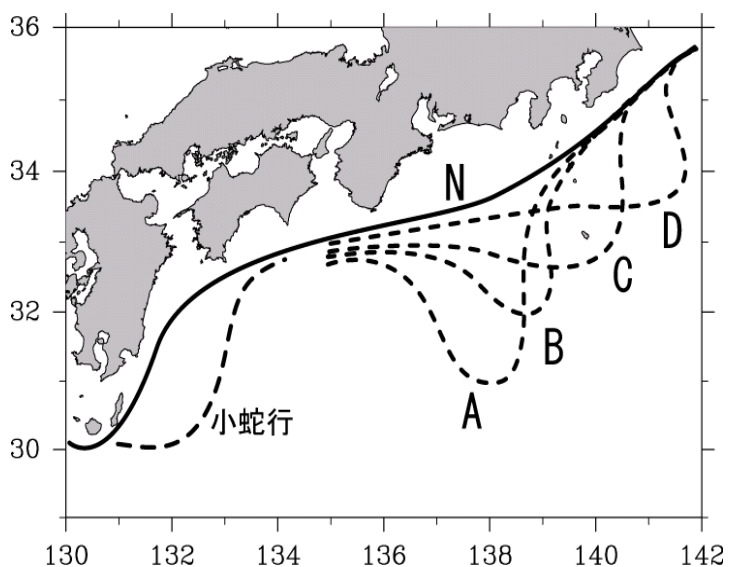


図1 黒潮流型の分類

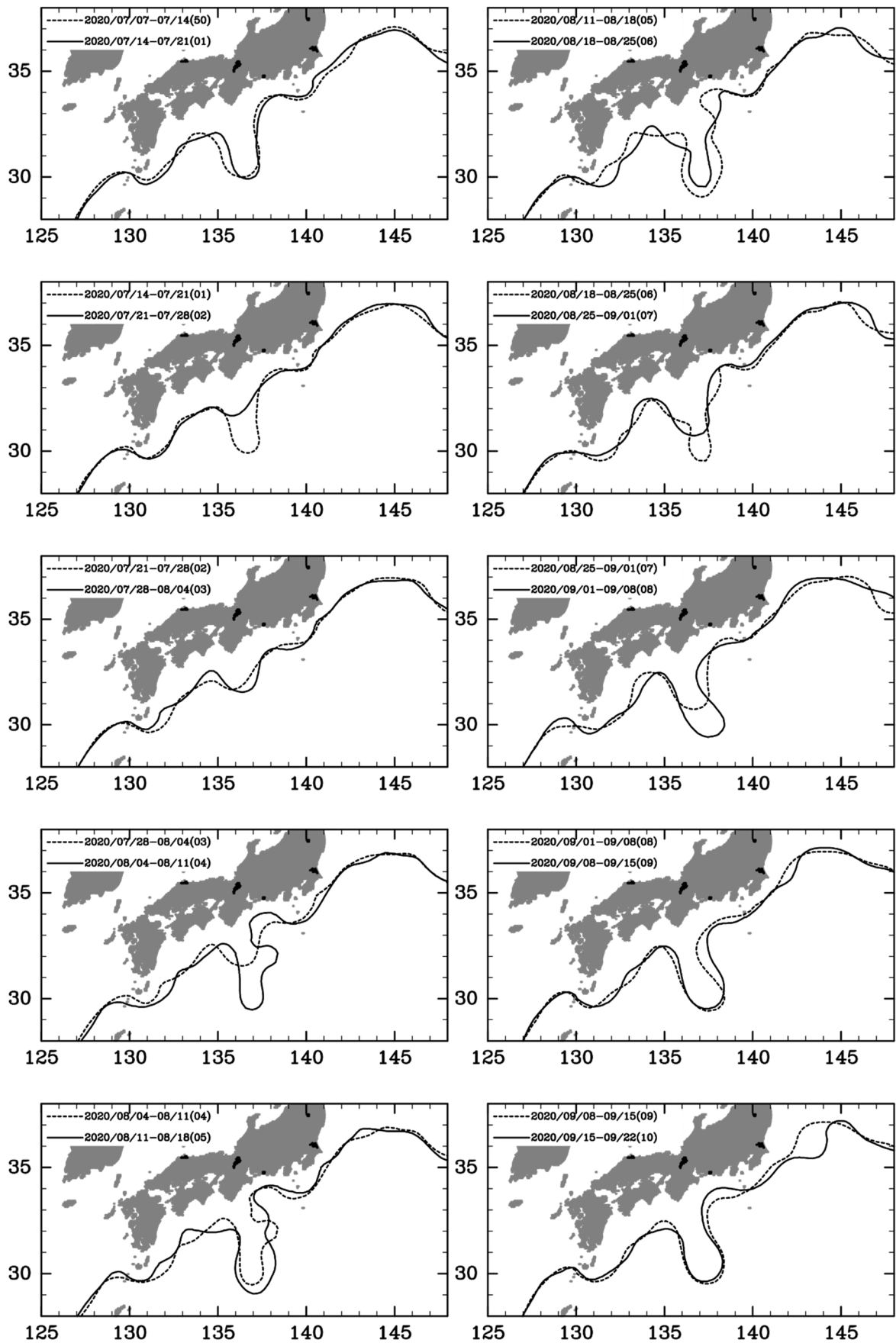


図2 黒潮流軸のパターン

(2020年7月~12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

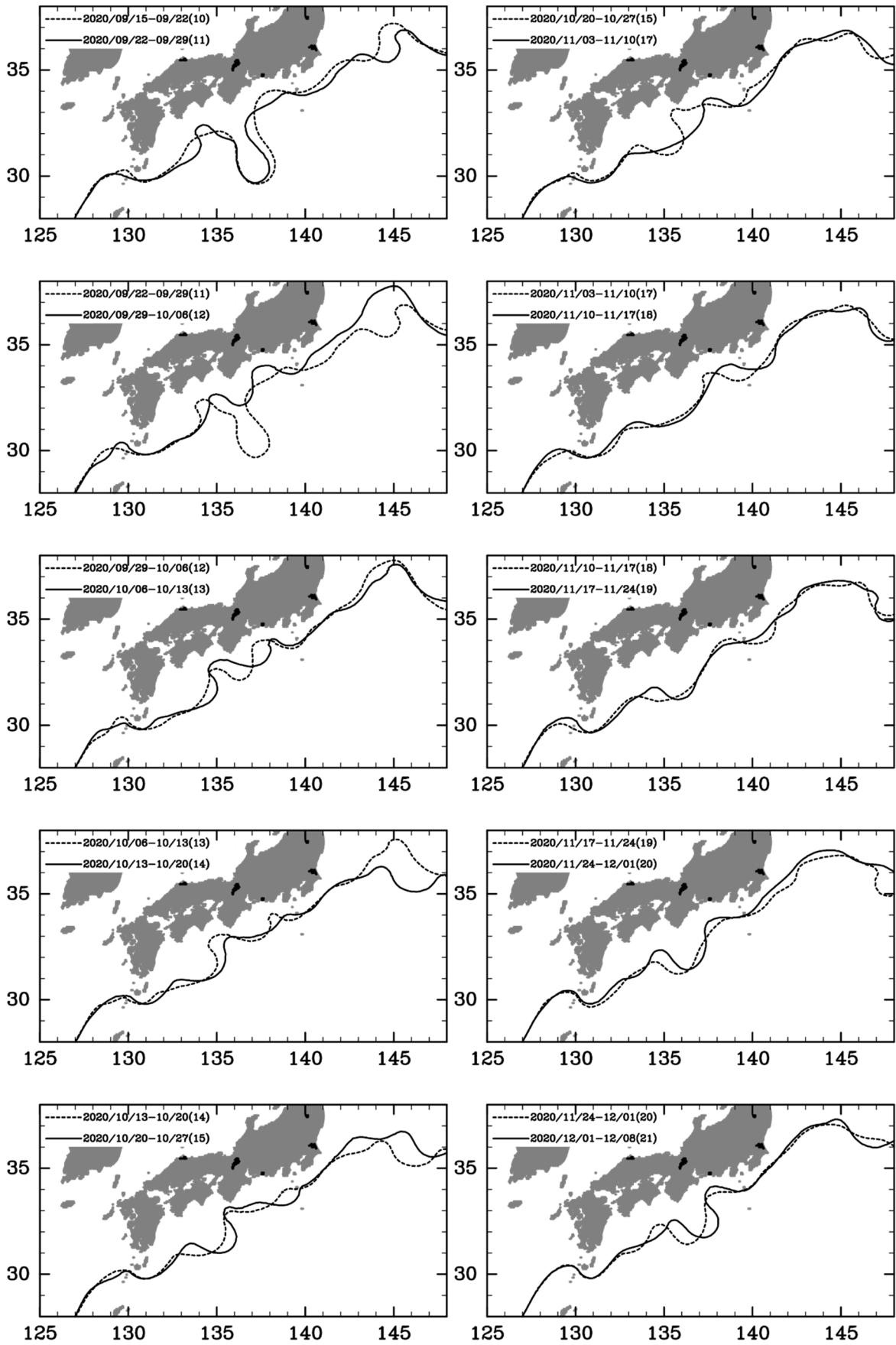


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2020年7月~12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2021年1月～6月)

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2021年級群)、1歳魚(2020年級群)、2歳魚(2019年級群)、3歳魚(2018年級群)、4歳魚(2017年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩～豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道南部東側では前年を下回る。宿毛湾、土佐湾では前年を上回る。紀伊水道外域では前年並。熊野灘では前年並～上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15cm～20cm前後(1歳以上)、期後半は7cm～12cm前後(0歳魚)主体。豊後水道南部東側では、5cm～10cm前後(0歳魚)主体。宿毛湾～紀伊水道外域では、14cm以上(1歳以上)および14cm未満(0歳魚)が漁獲される。熊野灘では14cm以上(1歳以上)主体。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：駿河湾～相模湾西部では前年並。相模湾東部では前年並～下回る。(伊勢・三河湾、渥美外海では、前年と比較できず)

(2) 漁期：伊勢・三河湾、渥美外海では6月以降。駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海では12cm以下(0歳魚)主体。駿河湾、相模湾西部では、期前半は15cm～17cm前後(2歳魚)主体に13cm～15cm(1歳魚)が混じり、期後半は12cm以下(0歳魚)主体。相模湾東部では13cm～15cm(1歳魚)主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：前年並～上回る。

(2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、1月は房総海域～常磐海域、2月～5月は房総海域～鹿島灘、6月以降は房総海域～三陸南部海域で形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

(3) 魚体：10cm～15cm前後(1歳魚)、15cm～17cm前後(2歳魚)、16cm～19cm前後(3歳魚)、18cm以上(4歳以上)。

漁況の経過(2020年7月～2020年11月)および見通し(2021年1月～6月)についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、2010年～2014年に比較的良好的な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万ト

ンを上回った。その後も良好な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2019年は342万トンと推定された。

2017年級群（4歳魚）は、2020年資源評価において、加入量が297億尾と推定されており、2016年級群と同程度の高い値となっている。2020年における3歳魚としての漁獲状況は、前年を上回った。2017年級群の推定残存資源量は、2016年級群の同時期と同程度の高い水準にある。

2018年級群（3歳魚）は、加入量が635億尾と推定されており、近年において最も高い値となっている。2020年における2歳魚としての漁獲状況も前年を大きく上回っており、高い豊度を示している。2018年級群の推定残存資源量は、2017年級群の同時期を上回っている。

2019年級群（2歳魚）は、加入量が391億尾と推定されており、近年の高い水準を維持するものの2018年級群を下回る値となっている。2020年における1歳魚としての漁獲状況も、前年を下回った。2019年級群の残存資源量は、2018年級群の同時期を下回っている。

2020年級群（1歳魚）は、2020年に0歳魚として、主に西日本海域（北薩～土佐湾）において前年を上回る漁獲が見られている。沖合域においては、5月～6月の移行域幼稚魚調査（水産資源研究所）では前年と同程度の漁獲が見られ、6月～7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）および9月～10月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）では前年を上回る漁獲が見られている。これらの情報から、現時点では不確実であるが、2020年級群の加入量は、前年並～上回る水準と考えられる。

2021年級群（0歳魚）については、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

・来遊量：北薩、薩南海域では、4月まで1歳魚（2020年級群）、5月以降は0歳魚（2021年級群）が漁獲の主体となる。本海域の漁獲状況は好調に推移しており、来遊量は非常に低調だった前年を上回る。

日向灘では、5月まで1歳以上、6月は0歳魚が漁獲の主体となる。今期の1歳以上の漁獲動向の参考となる三重県・高知県・鹿児島県の直近のまき網漁獲量は、現時点で前年を上回っている。よって、今期の来遊量は前年を上回る。

豊後水道南部西側では、3月まで1歳魚および2歳魚、4月以降0歳魚が漁獲の主体となる。2020年級群が主体であった前期のまき網漁獲量が前年を上回って推移しており、今期も明け1歳魚として引き続き漁獲されると期待される。よって、今期の来遊量は前年を上回る。

豊後水道南部東側では、0歳魚が漁獲の主体となる。現時点で0歳魚の予測は困難であるが、今期の来遊量は、特異的に好調であった前年を下回る。

宿毛湾、土佐湾では、1歳以上および0歳魚が漁獲される。今期主体となる2020年級群の漁獲状況は、まき網、定置網ともに前年を上回って推移している。よって、今期の来遊量は前年を上回る。

紀伊水道外域西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。本海域においては年間を通じて成魚を漁獲する漁業が少ないため、漁況からの来遊量の予測は難しいが、近年の漁獲傾向から、来遊量は前年並となる。

紀伊水道外域東部では、0歳魚および1歳以上が漁獲の主体となる。本海域において、定置網は2016年

以降、1 そうまき網は 2017 年以降、低調に推移している。また、潮岬沖での黒潮の離岸傾向が継続した場合、マイワシ漁場の形成条件は悪いと考えられる。以上より、来遊量は低調であった前年並となる。

熊野灘では、1 歳以上が漁獲の主体となる。本海域における春季の漁獲量とマイワシ太平洋系群の 3 歳以上の資源量には正の関係が認められている。太平洋系群の 3 歳以上の資源量は前年を上回ると予測されていることから、今期の来遊量は前年を上回る。ただし、房総海域～伊豆諸島海域で大規模な産卵場が形成されると、熊野灘への 3 歳以上の来遊は少なくなる傾向があり、今期も同様の状況になる可能性がある。1 歳魚および 2 歳魚については、前期にまとまった漁獲が見られたことから、今期の来遊量は前年並～上回る。以上より、全体としての来遊量は前年並～上回る。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、北薩～豊後水道南部西側では、期前半は 15 cm～20 cm 前後の 1 歳以上、期後半は 7 cm～12 cm 前後の 0 歳魚が主体となる。豊後水道南部東側では、5 cm～10 cm 前後の 0 歳魚が主体となる。宿毛湾～紀伊水道外域では、14 cm 以上の 1 歳以上および 14 cm 未満の 0 歳魚が漁獲される。熊野灘では 14 cm 以上の 1 歳以上が漁獲される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では、0 歳魚（2021 年級群）が主体となる。マイワシ太平洋系群の資源状態は良好であり、海況によっては春以降に黒潮内側域からの来遊も期待できる（本海域では、前年同期は資源管理の取り組みとして操業を自粛していたため、前年と比較する予測は行えず）。

駿河湾、相模湾西部では、期前半は 2 歳魚（2019 年級群）主体に 1 歳魚（2020 年級群）が混じる。期後半は 0 歳魚が主体となる。今期は、南下回遊する産卵親魚が漁獲されると思われる。マイワシ太平洋系群の親魚量の予測値は前年並であることから、今期の来遊量は前年並となる。

相模湾東部では、1 歳魚が主体となる。今期主体となる 2020 年級群は、夏以降、漁況が低調に推移しており、相模湾内の資源水準は低いと考えられる。一方で、海況次第では、2 歳以上がまとまって来遊する場合もある。以上を踏まえ、今期の来遊量は前年並～下回る。

- ・漁期：伊勢・三河湾、渥美外海は 6 月以降。駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、伊勢・三河湾、渥美外海では 12 cm 以下の 0 歳魚が主体となる。駿河湾、相模湾西部では、期前半は 15 cm～17 cm 前後の 2 歳魚主体に 13 cm～15 cm の 1 歳魚が混じり、期後半は 12 cm 以下の 0 歳魚が主体となる。相模湾東部では 13 cm～15 cm の 1 歳魚が主体となる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は 1 歳魚（2020 年級群）、2 歳魚（2019 年級群）、3 歳魚（2018 年級群）および 4 歳（2017 年級群）以上となる。

4 歳以上の来遊量は、資源状態を反映し、前年並の高水準になると考えられる。3 歳魚の来遊量は、前述のとおり推定残存資源量が多いため、前年を上回ると考えられる。2 歳魚の来遊量は、高い水準を維持するものの、前年を下回る。1 歳魚の来遊量は、現時点では不確実であるが、沖合域での調査結果および各地で

の漁況から、前年並～上回ると考えられる。以上より、全体としての来遊量は前年並～上回る。ただし漁獲量は、まき網の操業状況に左右される。

- ・ 漁期・漁場：まき網の漁場は、1月は房総海域～常磐海域、2月～5月は房総海域～鹿島灘、6月以降は房総海域～三陸南部海域で形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

- ・ 魚体：近年および直近の出現状況から、1歳魚は10 cm～15 cm 前後、2歳魚は15 cm～17 cm 前後、3歳魚は16 cm～19 cm 前後、4歳以上は18 cm 以上。まき網では、1月は3歳魚、4歳魚、2月～3月は2歳魚、3歳魚、4月～5月は3歳魚、4歳魚が主体となる。6月には、1歳魚～4歳魚が漁獲される。定置網では、2歳魚、3歳魚主体に、1歳魚および4歳以上が混じる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2021年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2021年級群）、1歳魚（2020年級群）、2歳魚（2019年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～日向灘では前年を上回る。豊後水道西側では前年並～下回る。豊後水道東側では前年を上回る。宿毛湾・土佐湾では前年並～上回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：12 cm未満の1歳魚主体。

2. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘ではほとんど漁獲されない。伊勢・三河湾、渥美外海では前年と比較できず。駿河湾、相模湾西部では前年並～下回る。相模湾東部では前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：8 cm～12 cmの1歳魚主体に、12 cm～14 cmの2歳魚が漁獲される。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域、三陸南部海域では前年を上回る。常磐海域、三陸北部海域、道東海域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期・漁場：道東海域、常磐～房総海域の1そうまき網の主な漁獲対象にはならない。三陸海域の定置網、房総沿岸海域の2そうまき網は期を通じて散発的に漁獲される。

(3) 魚体：1歳魚は7 cm～11 cm以下、2歳魚は10 cm～13 cm。

漁況の経過（2020年7月～11月）および見通し（2021年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、2020年度資源評価において、2002年の291万トンピークに減少傾向に転じ、2019年は12万トンと推定された。資源水準は低位、動向は親魚量の最近5カ年の推移から減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2019年級群（2歳魚）は加入量が299億尾と推定されており、2018年級群の164億尾を上回った。2019年級群の0歳魚および1歳魚としての漁獲量は2018年級群のそれらを上回る水準と推定された。沖合域の調査船調査では、2020年の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）における推定1歳以上のCPUEと出現率は、低水準ながらも前年より高かった。北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）における推定1歳以上のCPUEは、前年を下回ったものの、東経160°以東の亜寒帯水域に少ないながらも分布が認められた。以上のことから、2019年級群は依然として低水準ではあるが、沖合域での分

布が認められつつある。

2020年級群（1歳魚）は、2020年7月～11月に東海海域を中心に、カタクチシラスや0歳魚として多獲され、それらの漁獲量は前年を上回った。沖合域の調査では、2020年の北西太平洋北上期浮魚類資源調査において、推定0歳魚のCPUEは前年を上回り、出現率が上昇した。北西太平洋秋季浮魚類資源調査における推定0歳魚のCPUEは前年を上回り、東経160°以東の亜寒帯水域にも分布が認められ、出現率も高まった。これらのことから、2020年級群は依然として低水準であるが、前年を上回る水準と考えられる。

2021年級群（0歳魚）は、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩、薩南海域では、2020年9月～10月に2019年同期と平年を大きく上回る漁獲があったことから、1月～3月は非常に低調だった前年を上回る。4月以降の漁獲主体となる前年秋季発生群は、順次計測しているものの、漁期中のため予測は困難である。

日向灘では、近年、沿岸発生群が漁獲の主体となっている。1月～5月の漁獲量は、前年10月～12月の高知県（宿毛湾）まき網漁獲量と前年8月～12月の宮崎県シラス漁獲量の相乗平均値と正の関係にあり、この指標値が前年を上回ることから、来遊量は前年を上回る。中型まき網による漁獲が本格化する6月の来遊量は现阶段では予測が困難である。

豊後水道西側では、1歳魚（2020年級群）が漁獲の主体となる。2020年級群が主体であった2020年7月～11月の水揚量は2019年同期を上回ったが、資源状態と前年同期（2020年1月～6月）の漁獲が好調であったことを考慮して、来遊量は前年並～下回る。

豊後水道東側では、1歳魚が漁獲の主体となる。2020年7月～11月におけるカタクチイワシの漁獲量は前年同期を上回ったことから、来遊量は前年を上回る。

宿毛湾、土佐湾では、期を通じて0歳魚（2021年級群）、1歳以上が漁獲の対象となる。1月～6月の宿毛湾中型まき網水揚量と前年10月～11月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計との間には同様の変動傾向が見られる。このことから、2020年10月～11月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計が前年を上回ったが、2020年1月～6月期も好漁であったことから、来遊量は前年並～上回る。

紀伊水道外域では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではない。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：12 cm未満の1歳魚主体。

(2) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、ほとんど漁獲されない。

伊勢・三河湾、渥美外海では、前年7月までぱち網の操業を自粛しており、前年と比較できないため、

来遊量の予測は困難である。なお、前年11月の漁獲量は多く、その後も漁獲は継続している。

駿河湾、相模湾西部では、漁獲対象となる1歳魚（2020年級群）の資源水準は前年に引き続き低水準であると推定されている。駿河湾内で本種はまき網の対象になっておらず、主に定置網で若干量混獲されることから、来遊量は前年並～下回る。

相模湾東部では、近年の漁獲傾向から、沖合域から来遊する1歳魚を主体に、2歳魚（2019年級群）が僅かに混じると考えられる。沖合域の秋季資源調査の結果では引き続き1歳魚の資源水準は低いと推定されている。よって、来遊量は低水準であった前年並となる。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：8 cm～12 cmの1歳魚主体に、12 cm～14 cmの2歳魚が漁獲される。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、2019年級群は1歳魚としての2020年11月までの水揚量が前年を上回ったものの低水準であったため、1月～6月の来遊量はほとんど来遊がなかった前年を上回るものの極めて低水準である。2020年級群は0歳魚を対象とする秋季九十九里海域における2そうまき網の漁獲量が前年を上回ったため、来遊量は前年を上回る。常磐海域では、例年、予測期間中の漁場形成は極めて散発的であり、ほとんど漁獲はない。

三陸南部海域では、水揚量は2018年を底にやや回復傾向にあることと、定置網や調査船でもある程度漁獲されつつあることから、前年を上回る。

三陸北部海域、道東海域では、漁業情報や調査船調査の結果から判断して、まとまった漁獲がない。

・漁期・漁場：資源量が多い年には、道東海域のまき網では8月～10月に、常磐～房総海域の1そうまき網では12月以降に漁場が形成されていたが、資源量の少ない近年は主な漁獲対象にはならない。三陸海域の定置網は1月で終漁後、5月以降に初漁となる。

- ・魚体：7 cm～11 cmの1歳魚を主体に、10 cm～13 cmの2歳魚も漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2021年1月～6月)

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2021年級群）、1歳（2020年級群）以上。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩・薩南海域、宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。日向灘、紀伊水道外域では前年並。豊後水道西側では前年並～上回る。豊後水道東側では前年を上回る。

熊野灘では前年並～下回る。全体としては前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：前半は1歳魚（15 cm～20 cm）が主体であり、後半に0歳魚（11 cm以下）が加入する。

漁況経過（2020年7月～11月）および見通し（2021年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

本系群の資源状態について、卵稚仔調査に基づく産卵量から資源水準を、半年単位のコホート解析により推定した資源量から資源動向を判断した。漁獲の大部分を占める鹿児島県～三重県の漁獲量は、2015年に過去最高となり、2016年以降は減少が続いたが、2019年は前年よりやや増加した。1978年以降の卵稚仔調査に基づいて求めた日向灘～潮岬（海区III）の年間産卵量は、2016年の134兆粒（高位水準）から減少して2018年には64兆粒となったが、2019年はやや増加して75兆粒となり、中位と低位の境界である60兆粒を上回ったため、資源水準は中位と判断された。コホート解析により推定した資源量は、最近5年間（2016年～2020年）において96千トンから47千トンへ減少したため、資源動向は減少と判断した。産卵量は長期的には増加傾向にあり、2003年以降は中位～高位水準を保っている。さらに、2007年以降の資源量、親魚量および加入量は、増減を繰り返しながらも全体としては比較的安定して推移している。これらは、長期的には再生産は高い水準で順調に行われていることを示唆しているものの、直近の資源は減少傾向にある。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

2021年前期（1月～6月）は1歳魚（2020年級群）主体の漁況になることが推測されるため、2020年後期（7月～11月）の漁況等から、1歳魚の来遊量を予測した。2021年前期（1月～6月）の後半には0歳魚（2021年級群）が加入するが、現時点での予測は困難である。

予測対象海域に相当する鹿児島県～三重県の主要港における前期（1月～6月）水揚量と後期（8月～12月）水揚量には、強い正の関係がある。一方、後期（7月～11月）水揚量と翌年前期（1月～6月）水揚量にも、弱いながらも統計的には有意な正の関係がある。2020年後期（7月～11月）の水揚量は17千トンであった。2000年～2019年の後期（7月～11月）水揚量と翌年前期（1月～6月）水揚量の間関係を用いて、2021年前期（1月～6月）の水揚量は8千トンと予測された。これは、前期（1月～6月）の水揚量において、過去10年間（2011年～2020年）で最も低かった2020年前期（1月～6月）の152%に相当する。よって、2021年前期（1月～6月）の来遊量は、海域全体としては前年を上回る。

北薩および薩南海域では、1歳魚（15 cm～20 cm）主体で、5月以降は0歳魚（5 cm～10 cm）が主体となる。1月～4月に主体となる1歳魚（2020年級群）の漁況は、2020年5月以降の漁獲が前年を下回って推移していることから、前年を下回ると考えられる。なお、今期5月以降主体となる0歳魚（2021年級群）の来遊量は予測できない。

日向灘では、1月～4月は1歳以上（18 cm～20 cm）、6月は0歳魚が主体となる。1月～4月に主体となる1歳以上は、鹿児島県主要4港の前年10月～12月のまき網漁獲量と正の関係がある。2020年11月時点

での鹿児島県の漁獲量は前年並で推移していることから、来遊量は前年並と考えられる。なお、0歳魚が主体となる6月の漁況は予測できない。

豊後水道西側では、1月～3月は1歳魚（15 cm～20 cm）、4月～6月は0歳魚（10 cm前後）が主体となる。2020年7月～11月の漁獲量が1,186トンで前年並であったことから、1月～3月に主体となる1歳魚（2020年級群）の漁況は前年並と考えられる。前年1月～6月の水揚が低調であったことから、来遊量は前年並～上回ると予測される。

豊後水道東側では、1歳魚（15 cm～20 cm）、0歳魚（5 cm～10 cm）が漁獲される。漁獲の主体となる0歳魚の産卵親魚になり得る1歳魚（2020年級群）の水揚量が前年同期を上回っていることから、来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、1歳以上および0歳魚が漁獲される。宿毛湾中型まき網における7月～11月の水揚量と、翌年前期の水揚量には正の関係がある。2020年7月～11月の水揚量が前年を下回ったことから、来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、近年の漁獲が低調に推移していることから、来遊量も前年並で低いと予測される。

紀伊水道外域東部では、1そうまき網および棒受網の漁獲量は、2016年以降減少している。また、熊野灘南部の定置網および潮岬周辺の棒受網においても、漁獲量は総じて減少傾向である。さらに、黒潮が潮岬で離岸傾向を継続した場合、来遊条件は良好ではないと考えられる。以上より、来遊量は前年並で、引き続き低調に推移すると予測される。

熊野灘では近年、冬春季に成魚の産卵回遊がみられ、高水準の漁獲が続いている。そのため、今期の漁況には、産卵回遊を行う1歳以上の来遊量および海況が大きな影響を与えられとされる。2017年～2020年の冬春季には大型成魚が漁獲の主体となったが、2017年級群以降の漁況は低調であることから、今期も大型成魚を主体に前年を下回ると考えられる。また、一部が産卵群に加わると想定される1歳魚（2020年級群）も、2020年7月～11月の漁況から前年並と考えられる。以上より、来遊量は前年並～下回ると予測される。なお、産卵群は暖水波及の前線域で漁獲されることが多く、暖水波及は漁況に良い影響を与える可能性があるが、黒潮の流路がA型で推移する時の挙動については情報が少なく、影響を予測することは難しい。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2021年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2021年級群）、1歳魚（2020年級群）、
2歳魚（2019年級群）、3歳（2018年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域、日向灘、宿毛湾・土佐湾では低調であった前年を上回る。豊後水道では前年を下回る。

(2) 魚体：北薩～薩南海域では1歳魚、2歳魚主体、日向灘、豊後水道では1歳魚主体、宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚主体。0歳魚は14 cm以下、1歳魚は14 cm～20 cm、2歳以上は20 cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域西部・熊野灘では前年並～下回る。紀伊水道外域東部では極めて低調であった前年を上回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域東部では1歳魚～4歳魚主体、熊野灘では1歳魚主体。0歳魚は12 cm以下、1歳魚は14 cm～21 cm、2歳以上は21 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：伊豆東岸では前年並、西湘地区では下回る。

(2) 魚体：主体となる1歳魚は16 cm～22 cm。

漁況の経過（2020年7月～11月）および見通し（2021年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降減少した。2009年～2013年は横ばいで推移したが、その後再び減少している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降3.2億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。2020年度の資源評価において、2019年の資源量は3.8万トン、親魚量が2.0万トンと推定された。

2018年級群（3歳魚）の加入量は3.9億尾と推定され、2020年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ない。

2019年級群（2歳魚）の加入量は3.4億尾と推定された。低水準ながら2020年前半の漁獲の主体となったが、2020年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2020年級群（1歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。加入量の指標となる各県地先の漁況は、宿毛湾まき網ゼンゴ資源量指数（4月～11月）は前年を上回り、宮崎県南部定置網アジ仔 CPUE（4月～6月）と伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量（4月～11月）は前年並、宇和島港まき網ゼンゴ CPUE（4月～11月）と串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）は前年を下回った。4月～11月の指標値の相乗平均は2019年級群を下回ることから、2020年級群の加入量は2019年級群を下回ると考えられる。

2021年級群（0歳魚）は期後半から漁獲されると考えられるが、現時点での予測は困難である。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに、前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚：14 cm以下、1歳魚：15 cm～20 cm、2歳魚：21 cm～24 cm、3歳以上：25 cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状

では困難である。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、1歳魚、2歳魚（2020年級群、2019年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の漁獲量は、前年7月～12月の漁獲量と正の関係が認められ、2020年7月～11月は前年を上回っていることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

日向灘では、1歳魚が漁獲の主体となる。日向灘のまき網は、前年7月～12月漁獲量と高知県（宿毛湾）前年7月～11月まき網漁獲量の相乗平均値により漁獲動向を判断している。これらの指標値が前年を上回ることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1歳魚が漁獲の主体となる。0歳魚（2021年級群）が漁獲の主体であった2020年7月～11月の漁獲量は2019年同期を大きく下回った。また、近年の低調な資源状態を考慮し、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部東側では、1歳魚が漁獲の主体で、0歳魚も混じる。当海域における2020年の7月～11月漁獲量が前年を下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、0歳魚と1歳魚が主体となる。宿毛湾まき網の前年下半期漁獲量と上半期漁獲量には正の相関関係が認められる。この関係から、2020年下半期の水揚量から今期の来遊量を予測すると前年を上回ると予測される。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、2020年7月～11月は0歳魚（2021年級群）が漁獲の主体となり、漁獲量は前年を下回った。近年の漁獲動向から、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳魚～4歳魚（2020年級群～2017年級群）が漁獲の主体となる。2020年1月～6月のまき網全体での漁獲量は1989年以降で二番目に少なかった。漁場の海況（紀伊半島を北進する黒潮由来の暖水波及状況）に大きな変化がみられない可能性があるが、今期の来遊量は歴史的に不漁であった前年を上回ると予測される。

熊野灘では、2020年7月～11月の漁況では定置網で漁獲される0歳魚は前年を上回っているが依然として低水準であり、今期主体となる1歳魚は前年並～下回ると考えられる。2歳魚以上は少ない。以上から、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、1歳魚（2020年級群）が漁獲の主体となる。4月～11月の0歳魚（2021年級群）の漁獲尾数と翌年1月～6月の1歳以上の漁獲尾数には正の関係が認められ、これらの関係から今期の来遊量を推定すると前年を上回るが、太平洋系群の資源量が低調に推移していることや漁況が好転する兆候が見られていないことを加味すると前年並と予測される。

西湘地区では、1歳魚が漁獲の主体となる。2020年7月～10月の0歳魚漁獲量は低い水準であったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

(4) 房総～三陸海域の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の2020年7月～11月の漁獲量は1,222トンとなり、前年同期1,444トンを下回ったが、平年（過去5か年平均963トン）を上回った。仙台湾～三陸海域では、宮城県の2020年7月～11月の漁獲量は437トンで前年を下回った。例年20cm台後半が漁獲の主体となるが、今期は10cm台が多かった。岩手県の2020年7月～11月の定置網による漁獲量は167トンで前年並であった。青森県では2020年7月～11月に八戸の漁獲量は12トンで前年を大きく上回り、0歳魚（2021年級群）が漁獲の主体となった。平館の定置網による漁獲量は90トンで前年並であった。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2021年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：1歳魚（2020年級群）、2歳魚（2019年級群）、3歳魚（2018年級群）、
4歳魚（2017年級群）、5歳魚（2016年級群）、6歳（2015年級群）以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

- (1) 来遊量：マサバは前年並～下回る。ゴマサバは低調であった前年並～下回る。サバ類全体としては前年並～下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは27 cm～38 cm（2歳以上）主体。ゴマサバは北薩～薩南海域では27 cm～38 cm（2歳魚～5歳魚）主体。日向灘～豊後水道南部では25 cm～33 cm（1歳魚、2歳魚）主体、土佐湾では31 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは前年並。ゴマサバは前年を下回る。サバ類全体としては前年並。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは27 cm～36 cm（2歳魚～5歳魚）主体、ゴマサバは28 cm～36 cm（2歳魚～5歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは前年並～上回る。ゴマサバは前年並～下回る。サバ類全体としては前年並～上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは25 cm～40 cm（2歳以上）主体に20 cm～30 cm（1歳魚）も漁獲される。ゴマサバは30 cm～40 cm（2歳以上）主体に漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

- (1) 来遊量：マサバ3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年並。5歳魚は前年を上回る。6歳以上は前年並。マサバ全体としては前年並。ゴマサバは低調であった前年並。サバ類全体としては前年並。
- (2) 漁期・漁場：マサバは漁期当初は伊豆諸島北部海域および三宅島周辺海域が主漁場となり、盛漁期には銭洲周辺海域にも漁場が形成される。期後半は伊豆諸島北部海域が主漁場となる。ゴマサバは三宅島周辺海域、銭洲周辺海域が主漁場となる。
- (3) 魚体：マサバは29 cm～35 cm（4歳以上）主体に漁獲される。ゴマサバは31 cm～36 cm（3歳魚）主体に25 cm～30 cm（1歳魚、2歳魚）および33 cm以上（4歳以上）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年並。5歳魚は前年を上回る。6歳以上は前年並。マサバ全体としては前年並。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては前年並。
- (2) 漁期・漁場：まき網では期を通じて犬吠～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。三陸海域の定置網では4月以降に漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは、25 cm～31 cm（3歳魚）主体に、期前半は28 cm～35 cm（4歳以上）も混じり、期後半は24 cm～31 cm（3歳以下）の割合が増加する。

漁況の経過（2020年7月～11月）および見通し（2021年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2013年以降の加入量水準の高い年級群の発生により増加傾向を示し、2019年の資源量は、資源量を推定している1970年以降で最高水準となっている。2013年級群以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2014年級群（7歳魚）以上の残存資源量は少ない。

2015年級群（6歳魚）は、2020年11月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が67億尾と近年の平均（103億尾）を下回る水準である。

2016年級群（5歳魚）は、推定加入量が113億尾と近年の平均程度の水準である。

2017年級群（4歳魚）は、推定加入量が100億尾と近年の平均程度の水準である。

2018年級群（3歳魚）は、推定加入量が301億尾と卓越して高い水準であるが、これまでの各地漁業の漁況では、推定加入量が卓越して高い2013年級群の同時期の漁獲量を大きく下回っており、加入量の見積もりの不確実性は高い。

2019年級群（2歳魚）は、推定加入量が58億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（1歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9月～10月）および再生産関係から、近年の平均程度の水準と推定されている。

2) ゴマサバ

資源量は2004年～2011年に高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2019年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となっている。

2016年級群（5歳魚）は、2019年11月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が3.0億尾と近年の平均（4.8億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2017年級群（4歳魚）は、推定加入量が2.3億尾と近年の平均を下回る水準である。

2018年級群（3歳魚）は、推定加入量が2.2億尾と近年の平均を下回る水準である。

2019年級群（2歳魚）は、推定加入量が1.1億尾と近年の平均を大きく下回る水準である。

2020年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均程度の水準と推定されているが、2020年級群を対象とした直近の漁況が低調に推移していることから、加入量の見積もりの不確実性は高い。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。2歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3歳魚（2018年級群）は、加入量が卓越して高い水準であり、来遊量は前年を上回る。4歳魚（2017年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並。5歳魚（2016年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。6歳魚（2015年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年並となる。マサバの来遊量は前年並となる海域が多い。

(2) 漁期・漁場、魚体

犬吠以北海域でのまき網漁業では、7月上中旬は低調に推移し、7月下旬は八戸沖に漁場が形成さ

れた。8月も継続して八戸沖に漁場が形成されたが、低調に推移した。9・10月は漁獲がまとまらず低調に推移した。道東沖では10月にわずかに漁獲された程度であった。11月は八戸沖～犬吠海域で漁場が形成されたが、近年に見られている1日に1万トンを超えるようなまとまった漁獲は見られなかった。7月～11月の漁獲量は、犬吠以北海域におけるまき網では2.7万トンと前年同期（3.5万トン）を下回り、千葉県以北の定置網等では6.0千トンと前年同期（8.7千トン）を下回り、伊豆諸島以西の海域では11.4千トンと前年同期（8.2千トン）を上回った。（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は以下のとおり。犬吠以北海域のまき網では、期を通じて犬吠～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。3歳魚が主体に漁獲され、期前半は4歳以上も漁獲され、期後半は3歳以下の割合が増加する。三陸海域の定置網では、4月以降に漁獲される。伊豆諸島周辺海域では、4歳以上が主体に漁獲され、3歳魚も混じる。漁場形成は黒潮流路変動に強く影響される。黒潮流路はA型で推移し、八丈島西側、三宅島付近を流れると予測されており、漁期当初には伊豆諸島北部海域および三宅島周辺海域に漁場が形成される。盛漁期には漁場が銭洲周辺海域にも形成される。漁期後半の漁場は伊豆諸島北部海域となる。熊野灘以西では昨年同様にマサバ主体の漁場形成がみられ、2歳以上が主体に漁獲される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚（2020年級群）：26 cm以下、2歳魚（2019年級群）：24 cm～28 cm、3歳魚（2018年級群）：25 cm～31 cm、4歳魚（2017年級群）：28 cm～32 cm、5歳魚（2016年級群）：29 cm～34 cm、6歳（2015年級群）以上：31 cm以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は低調であった前年を上回る。2歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均を大きく下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3歳魚（2018年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年並となる。4歳（2017年級群）以上は残存資源量が少なくなっている。ゴマサバの来遊量は、北薩～伊豆諸島周辺海域では前年並～下回り、犬吠以北海域では混獲される程度となるなど、低調であった前年並～下回る海域が多く、全体としては低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

7月～11月の漁獲量は、北薩～紀伊水道外域では3.0千トンと前年同期（5.3千トン）を下回り、熊野灘では4.2百トンと前年同期（9.0百トン）を下回り、伊豆諸島周辺海域では3.5千トンと前年同期（1.8千トン）を上回り、犬吠以北海域のまき網では3.9千トンと前年同期（0.6千トン）を上回り、千葉県以北の定置網などでは5.9千トンと前年同期（7.0千トン）並であった。（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、北薩～薩南海域では2歳魚～5歳魚主体、日向灘～豊後水道南部では1歳魚、2歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、紀伊水道外域では2歳魚～5歳魚主体、熊野灘では2歳以上主体に、期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では3歳魚主体に1歳魚、2歳魚、4歳以上も混じり、三宅島周辺海域、銭洲周辺海域が主漁場となる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚（2020年級群）：30 cm以下、2歳魚（2019年級群）：25 cm～34 cm、3歳魚（2018年級群）：30 cm～37 cm、4歳魚（2017年級群）：32 cm～38 cm、5歳（2016年級群）以上：33 cm以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産海洋研究センター	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
静岡県水産・海洋技術研究所	(取りまとめ機関)
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
三重県水産研究所	